

Title	ラインホールド・ニーバー「秘儀と意味」をめぐって
Author(s)	高橋, 義文
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.3 : 2-6
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3535
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ラインホールド・ニーバー「秘義と意味」をめぐって

高橋義文

〔本稿は、10月3日開催された「ニーバー研究会」での発表のレジュメである。ニーバーの論考「秘義と意味」の訳は、『聖学院大学総合研究所紀要』50号に掲載されているので、それを読む際の参考にしていただければ幸いである。〕

はじめに

「秘義と意味」は、ニーバーの思想の基本の一面を表現しているきわめて重要な論考である。ニーバーの神学的認識論の特徴を示していると言ってよいが、それはニーバーの思想の本質に関わる議論である。

この論文は、1958年に出版された『敬虔で世俗的なアメリカ』と題されたニーバーの論文集（Reinhold Niebuhr, *Pious and Secular America*. New York: Charles Scribner's Sons）。¹に、最終章第9章として収録されているものである。

その論文集の序文によれば、この論考は、「ユニオン神学大学院とハーヴァード大学でなされた説教に基づく」（*Ibid.*, vii.）ものとされているが、公刊されたのは本書が初めてである。ただし、後述するように、その趣旨は、1958年以前に、同名の題をもつ論文をはじめ、幾つもの著書や論文で、繰り返し論じられており、それらを踏まえてまとめられたものと考えてよいであろう。

I. ニーバーの同趣旨の議論

ニーバーは、「秘義と意味」の論考と趣旨が重なる議論を、著書や他の論文でも繰り返している。その主題を含み、それに関わる代表的な論文・著書は以下の通りである。

- ・“Truth in Myths,” J. S. Bixler, ed., *The Nature of Religious Experience: Essays in Honour of D. C. Macintosh*. New York: Harper, 1937. 117-135.²

神話の概念を論じた最初のまとまった論文。

ニーバーのイェール時代の指導教授マッキントッシュへの献呈論文集に寄稿したものであるが、出版直後献呈された当のマッキントッシュから激しい批判を浴び、それによっても注目された論文である。³

- ・*Beyond Tragedy: Essays on the Christian Interpretation of History*. New York: Charles Scribner's Sons, 1937.

この書では、永遠と歴史のパラドクスの関係が豊かに魅力的に展開されている。研究者の間では、この書をもってニーバーの神学は成熟した段階に入ったとされる。〔私自身は、成熟したニーバーは、その前の著書『キリスト教倫理の解釈』（1935年）に始まったと見るのがより妥当だと考えている。〕

- ・*The Nature and Destiny of Man*, Vol. I: *Human Nature*. New York: Charles Scribner's Sons, 1941; Vol. II: *Human Destiny*. Charles Scribner's Sons, 1943

ニーバーの主著（ギフォード講演）。第1巻では意味の問題が論じられ、秘義の概念は第2巻に多く出ている。当然であるが、「秘義と意味」（58年）と重なる議論が多い。

- ・“Mystery and Meaning,” *Discerning the Signs of the Times*. New York: Charles Scribner's Sons, 1946. 152-173.⁴

同名の題をもつこの論文は、同じ聖句の一つを冒頭に掲げ（コリント第一 13: 12）、内容は同じ趣旨であるが、論述の仕方が異なり、聖句をふんだんに用い、1958年の論文と比べて説教の体裁を多く残している。

- ・“Coherence, Incoherence, and Christian Faith,” *The Journal of Religion*, 31, no. 3 (July 1951),

155-168.⁵

議論の仕方は異なるが、その内容には「秘義と意味」（58年）と重なるところがある。

・ *Faith and History: A Comparison of Christian and Modern Views of History*. New York: Charles Scribner's Sons, 1949.

「秘義と意味」（58年）と重なる議論が、*The Nature and Destiny of Man*よりもはるかに多く見られる。たとえば、第3章では、時間と歴史をめぐる秘義と意味や、創造の秘義について論じられている。

「秘義と意味」（1958年）の論考は、したがって、以上のような同趣旨の議論の後になされたものであり、それらを踏まえて、直接この主題でまとめられた、より洗練された論考と言ってよいであろう。

II. 「秘義と意味」の概要

○ 要旨

- ・ 人間存在の究極的な問題は、それに意味があるのかどうか、それが理解できるかどうか、である。
- ・ 人間存在は、矛盾と不調和に満ち、秘義の半影に包まれている。秘義にもかかわらず意味があり、意味は秘義に覆われている。それは、人間をめぐる、創造、自由、罪の三つ秘義分析に明らかである。
- ・ それゆえ、その正確な理解は、少なくとも合理主義や神秘主義では不可能である。合理主義は、理性に頼るため理性を超えた秘義をとらえることができず、神秘主義は、秘義を認めはするが秘義に隠された意味をとらえることができないからである。
- ・ 人間存在をめぐる秘義と意味の解明の手がかりは、「やみの中に輝く光」（ヨハネ1・5参照）として受け止められるキリストの出来事におけ

る啓示への信仰である。秘義に包まれている意味が、秘義の存在を損なうことなく明らかとすることができるからである。

- ・ この洞察は、謙虚な信仰生活の証しによってのみ立証される。しかし、その洞察は、人間の普遍的な経験に合致しており、一定の普遍的妥当性をもつものである。

A. 人間存在をめぐる秘義

1. 創造の秘義

合理的理解の試み

- ・ アリストテレス—「第一原因」「至高の動者」の措定による合理的把握。存在は永遠的な構造を持つとする。
- ・ 近代科学—進化の過程における無限連鎖による秘義の克服。
- ・ 一部の宗教—創造を万物の原因についての科学的分析の代用とする。

以上は、いずれも意味の領域と合理的理解の違いを理解していない。

神秘主義的理解の試み

- ・ 新プラトン主義（プロティノス）—「派生」（流出）の論理によって合理性の限界をある程度承認。時間的世界を「一者」の頹落・派生とみなす。存在の根拠は、未分化の「一者」にあるとする。

この立場は、創造の秘義性を確保はできるが、それによって、時間的世界を悪ないし仮象とみなすことになる。つまり人間存在の意味が無視されてしまう。

キリスト教の立場

- ・ 創造を善とみなす。
- ・ 創造を「無からの創造」とみなす。合理的には不条理だが、秘義を確保する。時間的世界の事象は「無制約的なもの」に関わっており、それゆえに意味も確保されるが、それは合理的に

理解することが不可能であることを気付かせる。

- ・聖書の創造神話には、「永遠の神話」の深遠さがあり、その神話は、創造の秘義を擁護する。

創造の秘義は、人間存在に直接作用することはない。それが究極的な自由の秘義の象徴となると、はじめて人間の経験と直接かかわりをもつようになる。

2. 自由の二つの秘義とその特質

① 責任ある自由の秘義

- ・この秘義は、われわれ自身を内省することで明らかになりうる。自分が因果の流れを超越していることを知っているからである。
- ・この自由は、被造物としての有限性にもかかわらず存在する。
- ・しかし、この世界には物事を決定するさまざまな条件があり、ある程度予想ができる状況があるが、それは自由があることを否定するものではない。そうした相対的決定論的状况にもかかわらず自由の次元は存在する。
- ・その点、科学は決定論的であって、この自由をまったく認めない。
- ・他方、良識、芸術、法、歴史学といった分野は、この自由を認めている。

② 罪の秘義

- ・この秘義は、人間の経験において確証される。
- ・この秘義は、人間が自らの自由を自らの目的のために、誤用、悪用せざるをえないという秘義である。
- ・罪（自己執着）は、自己を場として生じるのであって、自己の欲望や誘惑や無知などからではない。罪は、人間の自由すなわち創造の善の墮落である。すなわち、人間の「悲惨さ」と「尊厳」の源がともに人間の自由にあるのである。
- ・罪は、人間の有限性に関わっている。罪は、有限性の事実から逃れ、それを隠そうとする

人間の空しい努力の結果である。

③ 人間の自由の特質

- ・人間の自由の二つの秘義は、人間の自由の特質を明らかにしている。
- ・人間は、^{スピリット}精神〔霊〕として、自由であるとともに時間の流れのなかにある、時間の中にありながら時間を超えるインコングルーアスな（不調和な）存在である。
- ・この自由は、知性（理性）や身体を超越する。
- ・自らの悲惨さを知っている存在ととらえるパスカルらの人間理解と共通する。

以上の責任ある自由も罪の自由も、合理的に説明することは不可能である。

B. 秘義の解明

人間存在が、以上のように、合理主義によっても神秘主義によっても説明不可能な、秘義に包まれているとすると、人間存在の意味はどのように解明されるのだろうか。

① キリストの出来事—秘義への答え

- ・神秘宗教は、神の秘義を肯定することによって、人間の二つの秘義を解明しているかのようにみえる。自由の秘義は、自由を有限性から解放し、未分化の実在の一部とみなすことによって、人間の罪の秘義は、悪を人間自己の特殊な形態と見なし、そこからの解放によって、解決されるとする。
- ・ところが、聖書は、歴史上の出来事のうちに、歴史の意味の手がかりとなる啓示の深さと高さ、「やみの中に輝く光」を見分けようとする。
- ・歴史における諸啓示の集約・頂点を、苦難のメシアのドラマ「キリストの出来事」にみる。
- ・メシア待望の歴史に照らして、キリストとその十字架の死が、神の憐れみと正義の啓示、人間の罪の普遍性、道徳問題解明の不可能性の究極的な啓示・象徴である。

- ・キリストの啓示のうちに、歴史の目的に関わる人間存在の秘義と創造の秘義への手がかりの要点と頂点がある。
- ・キリストの啓示は、三つの秘義を照らす光である。それは、創造の秘義への信仰による手がかりである。
- ・この信仰に、人間の歴史的存在に意味があること、われわれの存在が自然の随伴現象でもなければ自然の不要の付着物でもないことが示されている。
- ・この十字架のキリストに象徴される愛は、創造の秘義そのものである。それは信仰の知恵（神の愚かさ）であり、それは経験に基づいて意味の構造を確定し、経験が実在それ自体の構造に関わっていると主張する。
- ・キリスト教信仰は、創造の秘義を前提としている。それが存在の根拠である。
- ・キリストの出来事は、人間の窮境—罪と自由を自己のために利用する人間の傾向と自己執着とからなる—への答えである。これが、「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」られたことの意味であり、福音である。
- ・信仰の知恵には、感傷も冷笑主義もない。いかなるユートピア的理想主義もない。人間の利己主義をありのままに認めるのである。

② 倫理

- ・キリストの愛に裏付けられた究極的な規範は必要である。キリストは「第二のアダム」として規範的な意味も持つからである。
- ・しかし、カトリック倫理や自然主義的ヒューニズムやリベラルなキリスト教の理解は、否定されるべきである。
- ・しかし、この世界には、歴史を超える意味の接線は存在する。そこに倫理の可能性がある。
- ・キリスト教の規範は、自由の秘義に基づく人間の自由が働く愛の予測できない（未決定的）可能性の象徴として、倫理的生の超越的終末論的頂点の象徴として、必要である。

③ 意味の手がかりとしての信仰の立証

- ・秘義の中に意味の手がかりを見つける信仰の正当性を立証する唯一の方法は、生活の中でそれを証しすることである。
- ・それは、自己矛盾の窮境が普遍的であるとの認識と、罪への神の赦しへの感謝とから導き出される愛である。感謝と思いやりは、人間への悲観主義から生まれる。
- ・その確信が、自己を絶望から「新しいいのち」へと引き上げる。
- ・その意味において、キリストは、人間存在の秘義への究極的な答えである。
- ・その答えは、思弁的なものではなく、内なる経験に委ねられるべきものである。

III. 論考「秘義と意味」の意義

この論文は、ニーバーの思想の本質的な特徴が凝縮されてあらわれている論考である。それはとりあえず以下の点に見出せる。

1. 意味の問い

- ・ニーバーにおける〈意味の問い〉の重要性。
- ・「人間実存と歴史の意味探求に注意深い関心をいだき続けた解釈学的思想家としてのニーバー」（千葉真『現代プロテスタンティズムの政治思想—R・ニーバーとJ・モルトマンの比較研究』新教出版社、1988年、32頁）。

- ・ニーバーにとってキリスト教は、人間存在と歴史に意味を見出し、与える宗教。意味を持つ歴史への確信。

2. 秘義と意味の弁証法と人間の精神^{スピリット}の理解の独自性

- ・創造の秘義にもとづく自由と罪。
- ・秘義が意味に与える意味

“Mystery does not annul meaning but enrich it. It prevents the realm of meaning from being reduced too simply to rational intelligibility and thereby given a false center of meaning in a relative or contingent historical force or end.”

(*Faith and History*, 103)

- ・人間の精神^{スピリット}の理解。別な著書で、自己超越的自己、根源的自由 (radical freedom) とも表現される。それは「神の像」(NDM I, 55)、「原義」(justitia originalis) (NDM I, ch.X) であるともされ、「予測できない (未決定的) 自由」(indeterminate freedom) の基盤となる。
3. キリストの出来事 (啓示) の決定性
- ・キリストの出来事とりわけ十字架の中心性
 - ・十字架を、メシアニズムの文脈を踏まえて主張。罪が歴史の問題であるゆえに歴史は意味・救済を求め、メシアニズムを生み出す。
 - ・この十字架理解から、世俗のキリスト教的理想主義と厳しく一線を画す、独特の現実主義的倫理を提示。
 - ・人間存在の秘義の分析等から論議を始めるが、実は、キリストの出来事から見ている。十字架はニーバー神学の核である。
 - ・その点で、ニーバーを単純に神学的リベラリズムの範疇に置く近年の動向 (フォックス、ハワーワス、ドーリエンら) には問題がある。自らの神学的確信を、19世紀の神学的リベラリズムを拒否し、同時に伝統的保守的キリスト教も否定しながら独自に展開したところに、ニーバーの特徴がある。
4. 弁証学的意義
- ・人間存在と歴史の理解についてのキリスト教の洞察の弁証の試みとなっている。
 - ・合理主義や神秘主義の哲学思想にたいし、もう一つの実在理解を示し、その妥当性を主張している。とくに自由に根を持つ罪の秘義は、普遍的に経験されるものであるゆえに、それへの答えは、一つの立場を占めていると主張している。
 - ・この見方が、ニーバーのキリスト教的政治的現実主義の根幹をなしている。ここに、ニーバーの現実主義の深みの次元が見られる。「秘義と意味」は、ニーバーの神学はもとよ

り、その現実主義を取り上げる際に、忘れてはならない議論である。

1 この論文集は、1956-57年に発表された諸論文および初出論文 (「秘義と意味」など) からなっているが、そこには、それぞれかなり長文の重要な論文が収録されている。たとえば、「敬虔で世俗的なアメリカ」(『アトランティック・マンスリー』誌100周年記念号〈1957〉収録論文)、「アメリカにおける高等教育」(ニーバーの貴重な高等教育論)、「自由と平等」(英国、フランス、アメリカにおける政治社会倫理)「アメリカの黒人への国家、共同体、教会の正義」(公民権運動初期の人種問題)、「西洋文明におけるキリスト教とユダヤ人の関係」(ユダヤ教神学大学院とユニオン神学大学院の合同教授会での発表〈1957年2月〉)などである。

2 これは、その後、以下のいくつかの文献に転載されている。Mandelbaum, Gramlich and Anderson, eds., *Philosophic Problems* (New York: The Macmillan Co., 1957); Gail Kennedy, ed. *Evolution and Religion* (Boston: D. C. Heath,); Reinhold Niebuhr, *Faith and Politics: A Commentary on Religious, Social, and Political Thoughts in a Technological Age*, ed. by Ronald H. Stone (New York: George Braziller, Inc., 1968).

3 マッキントッシュの議論については以下を参照。高橋義文『ラインホルド・ニーバーの歴史神学—ニーバー神学の形成背景・諸相・特質の研究』(聖学院大学出版会、1993年) 135-141頁。

4 この論文も以下に転載されている。その際、編者によって小見出しがつけられている。*The Essential Reinhold Niebuhr: Selected Essays and Addresses*, ed. and Introduction by Robert McAfee Brown (New Haven and London: Yale University Press, 1986).

5 この論文も以下に転載されている。*Union Quarterly Review*, 7, no. 2 (January, 1952), 11-24; Reinhold Niebuhr, *Christian Realism and Political Problems* (New York: Charles Scribner's Sons, 1953; *The Essential Reinhold Niebuhr: Selected Essays and Addresses*, ed. and Introduction by Robert McAfee Brown (New Haven and London: Yale University Press, 1986).

(たかはし・よしぶみ 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科長、教授)